

令和5年度 第6回東京の地域日本語教育に係る調整会議（概要）

1. 開催日時：令和6年2月8日（木）14：00～16：00
2. 開催方法：ハイブリッド開催
3. 参加者：11名（伊藤委員、加藤委員、神吉委員（座長）、久保委員、薦田委員（副座長）、シュレスタ委員、中尾委員、長谷部委員、矢崎委員、山浦委員、山形委員）
4. 内容：① 東京都及び東京都つながり創生財団からの事業報告
② 体制づくりを進める上で必要となる人材（コーディネーター等）

① 東京都及び東京都つながり創生財団からの事業報告

【資料】



<東京都からの説明>

- ・「令和6年度 東京における地域日本語教育の実施体制」
- ・「東京都地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」

<東京都つながり創生財団からの説明>

- ・「地域日本語教育に関する専門研修（日本語学習支援者スキルアップ研修）」
- ・「初期日本語教育モデル事業「はじめての日本語教室」」
- ・「東京都つながり創生財団 令和6年度地域日本語教育事業」

<主な意見>

○日本語学習の動機付けについて

（地域とのつながり）

- オンラインの日本語教室であっても、“誰かとつながっている”という気持ちが持てないと、そこにずっといようという気持ちになれないのでは。
- 日本語を学びたいと思っていない方をどのようにして地域日本語教育につなげるかは課題。だからこそ、モチベーションを保つような内容や地域とのつながりがとても大事。
- 日本語の上達だけではなく、「つながりができた」や「私の生活はこんなふうにな豊かになった」等、その人が社会で生きていく中でどう良くなったかを入れ込んだ広報動画を作成すれば極めて有用なものになるのでは。

(前頁の続き)

(日本語学習の目的)

- 地域での「言葉の学び」において何をを目指すのかももう一度考えていくと、関わり方が見えてくる。
- 初期の会話ができるようになると、例えば買物がこれくらい楽になるとか、お母さんであれば子供と楽しく日本語が話せるようになるとか、そういう目的が絵のような形で見えると継続がしやすいのではないかと思う。
- 日本語を学ばなくても生きていける人はたくさんいるので、日本語を学びたいと思わない限り、学習してくれないと思う。そういう意味ではやっぱり目的や目標が分かるような仕掛けをつくってあげるのが良いかもしれない。
- 回覧板が読める、PTAに参加できる、そういう身近なところのなりたい自分が思い描けるような絵を描いてあげることで地域に出られるのでは。

(日本語の評価)

- 自分たちの評価をきちんとしてほしいという声を学習者から聞く。自分の日本語の状態をチェックしてもらうことを好む人がこういうオンラインの日本語教室とかにも参加しやすいのではないか。

○外国人当事者の関わりについて

- 自治体が外国人コミュニティとのつながりを持つために、日本語のレベルがある程度高い人たち（外国人当事者）が何か役割を果たすことはできるのではないか。

② 体制づくりを進める上で必要となる人材（コーディネーター等）

<東京都からの説明>

- 検討のまとめ
(参考) 地域の事例の紹介
- 地域日本語教育の初めてハンドブック（仮称）の作成について
 - 初めて多文化共生推進担当になった区市町村職員が「地域日本語教育」を知り、理解するために最初に手にとるハンドブック

【資料】



○ハンドブックについて

(地域日本語教育って何?)

- 入管法の話と日本語教育の法律の話はラインが少し違うので整理したほうがよい。ここ数年で出てきた「総合政策」には根拠となる法律がないという大きな課題があるが、その辺の全体像を見せられるとよい。
- 日本の外国人施策は、法的なバックグラウンドが何もないままやっているので、行政の人には見えにくい部分があるかもしれない。そこを絵にして見せるとよいのでは。

(なぜ、地域日本語教育に取り組む必要があるの?)

- 地域日本語教育の概念的なものを一番トップに持ってきたほうがよい。
- 行政の人のほとんどが多文化共生を知らないと思うので、行政が何故外国人に日本語を教える役割を担うのか、はっきり明示した方がよい。多くの外国人が窓口等に来ているので、少しでも日本語を話してコミュニケーションが取れることが安心材料になるということをシンプルに書いたほうがよい。
- インパクトがあるのは(日本人の)高齢化率ではないか。外国人の高齢者の数も出すとよいかもしれない。
- 外国の人が日本語を学んだことで活躍している事例も入れた方がよい。地域日本語教育のプラスの面も強調してほしい。それは具体的でない実感しにくいと思うが、将来的にこういう人たちが私たちの社会を支えるという事例があったほうがよい。

(日本語教室は日本語学校と何が違うの?)

- 「日本語学校とは」といったときに、なかなか一まとまりで紹介するというのは難しい面もある。
- 日本語教室の説明の中で「先生」「生徒」とあるが、用語の使い方と定義ははっきりしておいた方がよい。

(その他)

- やさしい日本語をホスト社会の人に普及させるということは多文化共生のシンボルかなと思い、とても大事。また、外国人相談は日本語教育と両輪である。
- 子供の日本語教育については、成人とは違う性質の課題もあるが、それぞれに取り組まないといけない。
- 2世以降が階層上昇できるかどうかというのは、非常に重要。その環境をつくるのがまさに行政の仕事。